

## 《書評》

阪本ちづみ著 勉誠出版

## 『張恨水の時空間——

## 中国近現代大衆小説研究』

(神戸大学) 濱田 麻矢

張恨水（1895－1967）という作家を今の日本で知る人は多くないだろう。“鴛鴦蝴蝶派”とはロマンスを中心に描く大衆小説作家群を揶揄した呼称だが、張恨水は民国期、その鴛鴦蝴蝶派の代表的作家として絶大な支持を受けていた。本書は張恨水についての、日本で初めての専著である。

本書は全四部に分かれている。第一部は五本の論文と二篇のコラムからなる「張恨水作品論」、第二部は馬原、陳建功、王安憶についての論文計三篇と蘇童についてのコラム、そして岸陽子『中国知識人の百年 文学の視座から』への書評で構成される「中国現代文学研究」、第三部は「エッセイ」と題して中国・北京滞在時の四季を記した四篇と中国のポピュラー・ミュージックを紹介するコラムを収め、第四部は加藤三由紀、栗山千香子、宮尾正樹、牧陽一の諸氏が著者との関わりを綴った「解説とあとがき」となっていて、阪本ちづみという研究者の足跡を内外から捉えられる一冊となっている。本書については、すでに大衆小説研究という角度から池田智恵氏による入念な書評がなされている（『現代中国』第93号、2019年10月）。本稿では、メインテーマである張恨水研究、特に代表作の『啼笑因縁』についての論考を追ってみたい。

魯迅は鴛鴦蝴蝶派を含む大衆小説に対して冷厳な姿勢を取っていたが、同時に魯迅の母、魯瑞が熱心な張恨水ファンであったこともよく知られた事実だ。1934年、上海にいた魯迅が母に宛てた手紙には「母上様……三日前に『金粉世家』全12冊と『美人恩』全3冊を買いました。どちらも張恨水作です。二つに分けて世界書局からお送りしたので、もう着いたのではないでしょうか。私は読

んでおりませんので、どんな内容かはわかりかねます」とある。魯瑞は好奇心旺盛で物語を語るのが上手な女性だったというから、ストーリーに起伏があり、近代的な小道具を巧みに取り入れた張恨水小説に魅入られた読者となったことと思われる。

評者は張恨水の子供世代にあたる作家、張愛玲（1920－1995）を主な研究対象としているが、淪陥期上海を風靡したこの特異な作家は、創作生活の最初から張恨水への偏愛を隠そとしなかった。人気作家としての名声をほしいままにしていた1940年代前半、彼女は雑誌社主催の座談会において、自分の愛読書は「サマセット・モーム、オルダス・ハクスリー、歐米の脚本、唐詩、ゴシップ誌、張恨水」だと述べている。モームやハクスリーといったインテリ好みの著述家とゴシップ誌や張恨水と同じステージに並べてみせたのは、いかにも権威的な文壇から距離をとっていた張愛玲らしい。彼女自身、瞬く間に大評判となったデビュー作「沈香屑 第一炉香」を、やはり鴛鴦蝴蝶派として知られていた周瘦鶴編集の雑誌『紫蘿蘭』に持ち込んでいたのだった。

張愛玲のこうした振る舞い（日本占領期の上海で、商業主義雑誌や親日派メディアに露出したこと）に対して、良識派文人は或いは眉を顰め、或いは才能の無駄使いとして嘆惜したというが、魯迅でもなく丁玲でもなく、張恨水に私淑していた張愛玲にとっては、それはごく自然な選択だったのだろう。といっても、張恨水は日中戦争時には中華全国文芸界抗戦協会の理事を務め、積極的に抗日小説を推進していたことを忘れてはいけない。張愛玲が張恨水から吸収したのはその政治的態度ではなく、小説の叙事スタイルだったと考えるべきだろう。

張愛玲は、1968年に在米の研究者夏志清（1921－2013）あての手紙にこうも書いている。

「わたしはずっと張恨水が好きでしたが、濟安

以外に彼を褒めている人を知りません。このほかには、毛沢東だけが張恨水の細部の描写がすぐれていると讀えていましたが」。

濟安、とは夏志清の兄で文芸評論家の夏濟安(1916-1965)であり、その遺著*The Gate of Darkness*(1968)は、中国の左派作家を批判的に論じた最初期の英文研究書として知られている。

上海時代から渡米後に至るまで政治から距離を保ち続けた張愛玲、台湾そして米国と流亡を続け、頑なな反共文学研究者として知られていた夏濟安、そして中国共産党の領袖毛沢東が張恨水の「同好の士」であったというのは面白い偶然である(実際、毛沢東は張恨水小説をたいへん好んでいて、作家と単独会見したことあった)。張恨水小説にある「何か」がこの三人の文学の目利きを引きつけ、またその同じ「何か」が魯迅を始めとする主流の文学者を遠ざけたと言えるかもしれない。おそらくその「何か」とは、「鴛鴦蝴蝶派」にではなく、張恨水にこそ備わっていた魅力なのだろう。そして、著者阪本氏もまた、張恨水の魅力にとりつかれた、稀有な読者の一人だったのではないだろうか。

本書第一部には、張恨水の1930年代創作を代表する長篇小説『啼笑因縁』をめぐる論文が三本収められている。おそらく最も「張恨水らしい」小説として意識されていたのだろう。どの論考にも、「通俗文学／純文学」という二項対立に追随することなく、よく練り上げられたメロドラマとしての張恨水文学に従来にはない新しさを見出そうとする様々な試みが張り巡らされている。

巻頭論文「都市小説として『啼笑因縁』を読む」は、この長篇が「北京ガイド」として機能しており、大道芸人があつまる庶民の街天橋はヒロイン鳳喜に、モダン北京を象徴する北京飯店は富豪の令嬢何麗娜によって代表されているという。主人公樊家樹はさまざまな女性と近代的な「公園」を歩くが、彼に想いを寄せる閔秀姑が割り振られ

ているのは庶民の街である什刹海であったという指摘は、文学都市北京における公共空間の出現を考える上で示唆に富む。

第二章「メロドラマの中の狂気」は、小説テクストとしての『啼笑因縁』を飛び出し、大ヒット小説が映画化された際に生じたスキャンダルや訴訟の過程を丁寧に追いかけている。この論文は張恨水に限らず、1930年代中国で小説がメディアミックス展開してゆく際、どのような問題が起こりえたのか興味深い例を提示してくれるものだ。

そして第五章「メロドラマの中の狂気」では、『啼笑因縁』のほか同じくヒロインが正気を失う『芸術之宮』と、主人公の男性が狂う『風雪之夜』『平滬通車』という張恨水作品が比較される。著者は前者二つでは愛が、後者二つでは金銭が精神の“逸脱”に強く関与していると指摘し、張恨水が主人公の過酷な運命に「瘋」というパターンを与え、通俗小説の新しい装置として機能させることに成功したのだと結論づけている。

「瘋」についての議論に刺激されたところで、評者も張恨水小説の持つ「新しさ」が後世に継承されたと思われる一例をあげてみたい。以下は『啼笑因縁』の結末で、主人公樊家樹がかつて愛した女性、沈鳳喜を訪ねる場面だ。

家樹はドアを開けただけで、全身が感電したように麻痺してしまいました。目に入ったのは、あたり一面積もった雪の中、槐の木にもたれて立っている女性です。黒いズボンと赤い綿入れを身につけ、両足は深く雪の中に埋もれてしまっていました。彼女はドアに背を向けていて、ぼさぼさのショートヘアも雪にまみれています。足元に大きな丼が伏せてあり、その横には丸くて平べったい雪の塊がたくさん積み上げられて、銀幣のように見えました。丼で雪を固めて作ったものです。——北京の子供達は、冬の日にこうして雪で

お金を作つて楽しむのでした。

家樹に見初められて学校にまで上げてもらった鳳喜は、富に目が眩んで家樹を裏切り、軍閥の劉將軍の妾として嫁いだのだった。しかし輿入れした途端に態度を変えた將軍に虐待され、恐怖のあまり正気を失ってしまったのである。引用した場面は鳳喜の変わり果てた姿に家樹が息を飲む、というクライマックスシーンなのだが、メロドラマにおける「狂女」の登場として、このシーンはいかにも「静か」ではないだろうか。鳳喜はすでに名前も失い、「女性（女郎）」という普通名詞でしか呼ばれない。彼女は泣き叫ぶことも暴れることもなく、かつての恋人に顔を向けることすらしないのだ。凍える戸外で、自分が執着し続けてきた金を淡々と雪で“鑄造”する姿はあどけなくすらある。その後ろ姿を見た家樹は「全身が感電したよう」、もはや鳳喜が此岸に帰ってこないであろうことを悟るのだ。ストーリーの面白さ以外に、余白を残した「語りつくさない叙事」も、張恨水小説の魅力だったのでないだろうか。

さて、以下に掲げるのは張愛玲の初期代表作「金鎖記」の一場面である。ヒロイン七巧が自分の娘の恋人、童世舫と初めて会った時の描写を読んでみよう。

世舫が振り向くと、戸口に光を背にした小柄な老女が立っているのが見えました。顔はよく見えませんが、緑がかかった灰色にまるく龍の模様が入った絹の衿を身につけ、両手では真っ赤な湯たんぽを持ち、両側に背の高い女中を従えています。外は黄昏の光に満ち、階段には暗い緑のチェックのリノリウムが敷き詰められ、一歩一歩、光のないところへ通じていました。世舫は、これは狂人だと直感しました——理由はありません、ただ慄然とするばかりです。長白が紹介しました。「う

ちの母です。」

「金鎖記」は日本占領期上海という暗い水土に生まれた奇跡として傅雷に激賞された一篇である。後の場面でも繰り返される「一步一歩、光のないところへ」ということは、張愛玲文学における「荒涼」を凝縮させた表現として繰り返し論じられてきた。しかし、この作品の静かな緊張感は、明らかに張恨水小説から養分を吸収しているのではないだろうか。

「金鎖記」が書かれた抗日戦争期には、張恨水は抗戦文学作家として活動していたことは先ほど述べた通りだ。本書のコラム「張恨水及び通俗文学評価をめぐって」において、著者は「抗戦作家としての張恨水」が中国での再評価の要となったことを指摘すると同時に、張恨水論が依然として「スローガンをかけるにとどまっている」ことに歯がゆさを表明している。本書に収められた論考は、「通俗作家（だから文学的価値がない）」「愛国作家（だから政治的に評価する）」といった既定の枠組みを超えて、張恨水独特の魅力が那辺にあるのかという問いに満ち、張恨水小説が中国現代文学の確かな水脈を担っていたことを教えてくれる。著者は何度か米国の研究者ペリー・リンクを引いているが、本書もまた、リンクと同じく、国外にいるからこそ可能となった研究成果と言えるだろう。

本書が刊行される前に世を去った著者の張恨水論がこれ以上読むことができないのは残念でならない。読後、『啼笑因縁』の登場人物で誰が一番好きか、著者に尋ねてみたいと思った。

(2019年3月刊、246ページ、本体3,800円+税)